



なごや「聖歌」だより 12月号 '10

降誕祭—静かな喜び

降誕祭の聖歌には、どこかもの悲しさがあります。復活祭のはじけるような祝いの歌とは異なり、静かに、ひそやかに、主が人となって生まれ、神の救いの計画が始まったことを知らせます。しかし降誕は苦しみの始まりでもあります。復活は、十字架と死の向こうにあるからです。降誕は十字架への道の始まりです。イコンの赤子ハリストスの産着は、将来の死装束を、飼い葉桶は棺を、洞穴は墓を示しています。

晩堂大課の終わりのリティヤのスティヒラでは、「本来ありうべからざることが起こった、神である方が、人となり、天と地が合体し、神が地にくんだり人は天に昇ると」歌います。

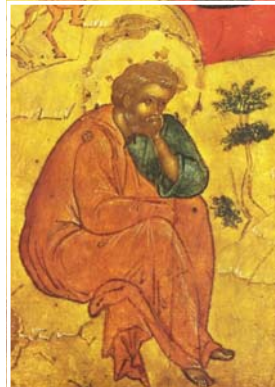
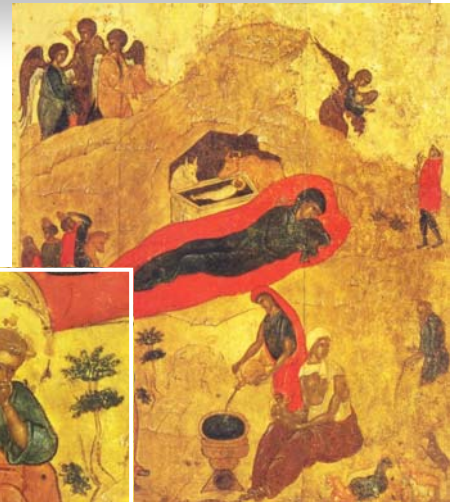
今日ハリストス生れ給いに、天と地とは合せられたり、今日神は地に降り、人は天に昇れり、本性の見るべからざる者は、今日人のために肉体にて見らる。

正教会では「神が人となったのは、人が神になるためだ」と教えます。ハリストスは私たちにも自分を捨てて、すべてを神に委て、聖神の恵みを受けて生き、限りなく神に似る者になってゆきなさいと命じます。

自分を捨てる、自分の思いを捨てる、とても難しいことです。イコンの片隅には疑いの思いから逃れられない夫イオシフの姿が描かれています。「妻マリヤが聖神によって子を産んだ」と直接天使から真実を告げられたにもかかわらず、信じ切れません。人間の常識や自分のわだかまりから離れられない私たち自身の姿でもあります。神のことばを信じ、受け入れ、神の母となった処女マリヤは憐れみに満ちたまなざしで、夫イオシフを通じて私たちをじっとを見えています。

スティヒラは続きます。

故に我等も彼を讃栄してよばん、至高きには光荣神に帰し、地には平安降り、蓋し爾の降臨はこれを賜えり。我が救世主よ、光荣は爾に帰す。



今年の降誕祭の日程

24日 17:30から晩堂大課
18:00から早課と一時課、
25日 9:30から聖体礼儀

去年までは24日晩に晩祷から聖体礼儀まで一気に行っていました。今年は2日に分けて行います。24日は晩祷だけなので、できるだけ完全な形で行いたいと思います。晩堂大課は悔い改めの雰囲気強い、誦経主体の地味な祈りです。静かな晩堂大課の終わりに、聖所を出てリティヤを行います。ここから一気に華やかさを増し、「トロバリ」続いて「至高きに」、早課が始まります。晩堂大課は一本の線のような単音で、早課は豪華な合唱聖歌で歌います。詳細は練習の時にお知らせします。見学の方も予想されます。宣教のチャンスです。美しい聖歌でお迎えしましょう。

聖歌練習

♪名古屋: 主日聖体礼儀後、

降誕祭の練習を行っています。

主日朝、9時15分頃から声出しウォーミングアップをしています。どなたもご参加できます。

♪半田: 12月15日11:45から

12月の指揮当番 5日マリア松島、12日ピーメン松島、19日エレナ広石、24日晩堂大課マリア松島、早課エレナ広石、25日ピーメン松島、(1月2日 マリア松島)

ズナメニイ研究会と練習会

12月15日1:30から。

クリュキー(記号)の復習をしながら、ズナメニイの記譜、音楽付けの特徴を学んでいます。テキストは2002年にリガの旧儀式派教会から出版されたズナメニイの教科書です。

ズナメニイはビザンティン聖歌から発祥した古いスラブ語聖歌で、美しくダイナミックな単音です。今回の降誕祭の晩堂大課では、ズナメニイのスティヒラも取り入れます。

15日のズナメニイの日に練習しますので、関心のある方はご参加ください。



日本の状況に合わせて適宜解説を加えてあります。

12. 讃歌

μεγαλνάριον; величание

大祭と特定の聖人の記憶日に、早課のポリエレイの後、全堂炉儀を行う間に歌われる歌で、「讃歌」または「讃揚詞」と呼ばれます。この名称はスラブ語の詞の冒頭の語「величанием(讃栄せん)」または「уважаем(崇め讃む)」からとったもので、日本語の場合は文法上語順が逆ですから「讃栄せん」「讃揚す」は文末になります。

讃歌はロシア系教会の伝統なので、テキスト(歌詞)は、『祭日経』『三歌経』などビザンティンで編纂された祈祷書には見られず、『連接歌集』328ページ「祭日の多燭詞及び讃揚詞ならびに抜粋聖詠」として載っています。ここでは「讃揚詞」と呼ばれていますが、讃歌のことです。ここには歌の歌詞と併せて誦すべき聖詠の句も掲載されています。

日本の楽譜では「三回歌う」という記載もありますが、三回とは限定されていません。このとき行われる全堂炉儀の進行具合を見ながら、間に聖詠の句をはさみながら何度でも繰り返します。小さな教会では三回でも十分ですが、大聖堂では炉儀に時間がかかるので、何度も繰り返す必要があるでしょう。

『連接歌集』の指示に従えば、選ばれた聖詠の句を挟み込みながら歌い、最後に「光栄は」「今も」「アリルイヤ」を3回繰り返して終わります。

ロシアでは、まず神品団が1回歌い、続いて聖歌隊が歌う、という方法も行われています。

ところで祭日用の楽譜に、カノンの第9歌唱の前に「讃歌を歌う」という注意書きがあるものがありますが、ここで「讃歌」と言われているのは第9歌唱の附唱のことで、ポリエレイ後の「讃歌」とは異なります。スラブ語では同じ動詞「讃め揚げん Величай」で始まるために(日本語では「我が霊よ、……讃め揚げん(崇め讃む)」)、日本語に訳すとき「讃歌」と混同されたものと思われる。

ロシアの修道院などでは夜半課の後、修道士たちが順番に聖人の不朽体やイコンに接吻しますが、その間、讃歌を繰り返します。また聖人への感謝祈の終わりにイコンに接吻するときも、同様に讃歌を繰り返し歌うこともあります。

祭日の讃歌、たとえば「降誕祭」は『連接歌集』329ページに

讃揚詞、右列詠隊始めて歌う。

**生命を賜ふハリストスよ、我等爾今我等の為に
婚姻を識らざる至浄なる童貞女マリヤより身に
て生れ給ひし主を讃揚す。**

次ぎて同詠隊又歌ふ。

右、全地よ、神の歎びて呼び、

左、其名の光栄を歌ひ、

右、光栄と讃美とを彼に帰せよ。

左、其悉くの奇蹟を傳へよ。神に謂ふべし、爾は其行事に於て何ぞ畏るべき。諸天は楽しむべし、地は祝ふべし。我等の神に歌ひ、其名に歌へ。其所為は光栄なり、美麗なり。彼は其民に救を遣せり。其名は聖にして畏るべし。神はシオン即極めて美しき處より顕る。我等の神は天に在り、地に在り、凡そ欲する所を行ふ。主よ、我永く爾の慈憐を歌はん。彼我を呼びて云はん、爾は我が父なり、我彼を長子となして、地の諸王より高くせん。列王彼に伏拝せん。何の神か我が神の如く大なる、爾は奇蹟を行ふ神なり。爾が有能の臂にて爾の諸敵を散らせり。我黎明の前に腹より爾を生めり、主は誓ひて悔いず、爾メルヒセデクの班に循ひて司祭と為りて世々に迄らん。主我に謂へり、爾は我の子なり、我今日爾を生めり、我に求めよ、我諸民を與へて爾の業と為し、地の極を與へて爾の領と為さん。書卷の中に我の事を記せり。神よ、爾の寶座は世々に在り、爾の国の権柄は正直の権柄なり。故に神よ、爾の神は爾に歎の膏を傅けたり、爾萬民を継がんとすればなり。主は世々に崇め讃めらる、「アミン」、「アミン」。

光栄、今も、「アリルイヤ」、三次。

今まで、トロパリ、スティヒラ、カノンなど、いろいろなタイプの聖歌についてお話ししてきましたが、すべて、いつ、どこで、どのように歌うかが定められています。内容的にも音楽学的にも秩序ある礼拝を形作るために、歌うときの立ち位置、歌い方までティピコン(礼拝規則)に細かく指示されています。礼拝の構造そのものが歌い方のスタイルや音楽の用い方、長さを決定します。プロテスタント教会の賛美歌のように、担当者の好みで選んだり、勝手に再構成したりすることができません。

ですから正教会の聖歌は、「音楽」として礼拝から切り放して評価したり、純粋に音楽美学的な用語で論じたりすることもできません。礼拝の構造、形式、祈祷文はことばに表わされた論理的流れに従って音楽要素を発展させ、礼拝を形作ります。音楽は礼拝の一部であって分離できません。

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 Liturgia

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料